

「労作実習」に対する児童教育学科卒業生の意識

立木 徹*・岩崎 哲郎**・伏見 陽児***

問題と目的

労作教育はドイツの教育実践家であり研究者である Kerschensteiner, G (1955) によって教育学的理論づけがなされた。この Kerschensteiner の労作教育については、さまざまな教育学的分析が行われてきた(大桃 1980, 大谷 1982, 梅根 1977, 渡辺 1981, 山崎 1993)。労作教育の実践に関して言えば、日本ではすでに昭和初期に小学校、中学校において実践がなされている(小原 1931, 小原 1933)。また、全人教育の視点から、玉川塾、茨城キリスト教大学において労作教育の実践が行われてきた(小原 1976, 大谷 1982)。

一方、近年大学授業改善の重要性が指摘され、さまざまな実践報告がなされるようになってきた(立木 1996, 岩崎・伏見 2003, 伊藤・大塚 1999)。これには、大学の大衆化に伴う学生の学力の変化や大学の社会的責任に対する見方の変化などが関連していると言える。大学が研究機関であると同時に教育機関でもある以上、教育目標の達成のための方法として授業改善に取り組むことは当然とも言える。

授業改善の必要性は、労作教育においても同様である。特に、労作教育の実践に関して言えば、さまざまな提案、報告があるにもかかわらず、労作教育の有効性を実証的・実践的に確かめた研究はほとんどない。このような点で、労作教育における教育効果の検証は教育改善上重要な課題と言える。

本研究では、茨城キリスト教大学における「労作教育(労作実習)」の教育効果の検証をテーマとして取り上げる。茨城キリスト教大学の児童教育学科には、労作実習を中心とした「労作体験教育」という科目が設置されており、筆者の一人がこの科目を担当している。キリスト教教育の理想を全人教育論に基づく人格形成の教育体系として展開することを目指し、実践的、体験的指導のできる者を養成するために、この科目は設置されたものである。児童教育学科が開設されたのは1982年であり、その翌年から2年次の必修科目としてさまざまな授業が行われてきた。当時の授業担当者は現在の担当者ではなく、授業内容も現在とは異なっている。主に、農業(畑作)と園芸が中心であり、それに森林管理(植林)がつけ加えられた。1986年には、日立市十王町の山林に自然学習センター管理棟が完成し、学内にある学校園に加えそこを実習地として利用することになった。1987年から現在の担当者が授業を行うこととなり、労作実習の内容も変化してきた。学校園での栽培と花壇作り、自然学習センターの開墾と森林管理(下草刈り、枝打ち作業)、枝の美しさ

* 茨城キリスト教大学生生活科学部

** 茨城キリスト教大学文学部

*** 千葉大学教育学部

と素朴さを体験するグループ別課題学習が授業の柱となった。栽培に関して言えば、タネまきから加工・調理までという方針で授業を進めることとし、収穫したものの調理も取り入れられた。具体的には、大豆の種まきから豆腐作り、ソバの種まきからソバ切りまでなどである。その後、1994年頃から限られた時間の中で行うことのできるバター作り、草木染め、紙すきなどが多くなってきた。これらの内容を見ると、これまでの労作実習は大きく次の3つの時期に分けることができる。

第Ⅰ期：1982年度（学科開設年度）入学生～1986年度入学生

第Ⅱ期：1987年度入学生～1993年度入学生

第Ⅲ期：1994年度入学生～2001年度入学生

それぞれの時期で行われた労作実習の教育効果を検証するために、児童教育学科卒業生を対象に意識調査を行うこととした。調査内容は、(1) 労作実習に対する興味や難しさについての当時と現在の気持、(2) それぞれの労作活動についての経験の有無とその印象、(3) 労作活動でどのような道具を使用したか、うまく使えたかについて、(4) 労作実習についての印象と役だったことの自由記述、(5) 自然認識の変化、食文化への関心、協力や目標達成の大切さなどについて実感、の5項目から成り立っている。Ⅰ期からⅢ期までの異なる活動の影響がどのような教育効果を与えたのかについて(1)～(5)の項目ごとに検討することにした。

方 法

調査対象

茨城キリスト教大学文学部児童教育学科卒業生名簿（1694名）の中からランダムに845名を選び調査対象者とする。

調査方法

調査対象者に自記式質問紙を郵送し、記入後に郵送による返送を求めた。なお調査はすべて無記名であった。

調査時期

2005年10月下旬から11月下旬。

調査内容と手続き

卒業生が在学中に受講した必修科目「労作体験教育（労作実習）」についての質問A～質問Fよりなる7頁の冊子を郵送し記入を求めた。「データ処理に当たっては個人情報保護に留意する」旨を調査用紙に記載した。質問内容は表1に示す。

1. 質問A（「労作体験教育（労作実習）」に対する興味・難しさに関する意識調査）

労作実習を受けていたとき、労作実習についての興味・難しさをどのように感じていたか、また現在はどうかを尋ねるものである。どの項目も「5. 強くそう思う」から「1. 全くそう思わない」までの5段階評定である。

2. 質問B（「労作体験教育（労作実習）」での活動についての記憶に関する意識調査）

労作実習では時期によって内容の異なるさまざまな活動が行われた。22の活動について、経験の有無、印象を尋ねるものである。

3. 質問C（「労作体験教育（労作実習）」での道具使用についての記憶に関する意識調査）

表1 質問紙の内容

質問 A：「労作体験教育（労作実習）」に対する興味・難しさに関する意識調査

[1] 「労作体験教育（労作実習）」の授業を受けていた当時はどのような気持ちでしたか。以下のそれぞれについて最もよく当てはまる数字に○印をつけてください。（選択肢はいずれの項目も「5. 強くそう思う, 4. そう思う, 3. どちらともいえない, 2. そう思わない, 1. 全くそう思わない」である）

- (1) 労作実習は興味深いものでしたか
- (2) 労作実習はめんどろでしたか
- (3) 労作実習は難しかったですか

[2] 「労作体験教育（労作実習）」について、現在はどのような気持ちですか。以下のそれぞれについて最もよく当てはまる数字に○印をつけてください。（選択肢はいずれの項目も「5. 強くそう思う, 4. そう思う, 3. どちらともいえない, 2. そう思わない, 1. 全くそう思わない」である）

- (1) 労作実習は今思うと興味深いものですか
- (2) 労作実習は今思うとめんどろなものですか
- (3) 労作実習は今思うとむずかしいものですか

質問 B：「労作体験教育（労作実習）」での活動についての記憶に関する意識調査

次に挙げる労作活動の実習についてどの程度覚えていますか。以下のそれぞれについて最もよく当てはまる記号に○印をつけてください。（選択肢はいずれの項目も「a. よい印象が残っている, b. よくない印象が残っている, c. やった記憶はあるがほとんど印象に残っていない, d. 経験しなかったと思う」である）

- (1) 植林, (2) 下草刈り, (3) 枝打ち, (4) 草花の栽培（花壇作り）, (5) 野菜の栽培, (6) イモ類の栽培, (7) いちご栽培, (8) そばの栽培, (9) 麦作り, (10) 米作り, (11) 収穫物の料理 (12) そば打ちやうどん作り, (13) パン作り, (14) バター作り, (15) 豆腐作り, (16) ジャム作り, (17)ソーセージ作り, (18) よもぎ団子作り, (19) 草木染め, (20) 紙すき, (21) 織物作り (22) 糸つむぎ

質問 C：「労作体験教育（労作実習）」での道具使用についての記憶に関する意識調査

次に挙げる栽培、料理などでいろいろな道具を使用したことについて、どの程度覚えていますか。以下のそれぞれについて最もよく当てはまる記号に○印をつけてください。（選択肢はいずれの項目も「a. 割合うまく使えたと思う, b. あまりうまく使えなかったと思う, c. 使った記憶はあるがどの程度使えたか覚えていない, d. 使用していない」である）

- (1) 植林するのに唐くわを使った
- (2) 下草を刈るのに大ガマを使った
- (3) 枝打ちするのにノコギリを使った
- (4) 畑を耕すのに万能ぐわを使った
- (5) 畑にうねを立てるのに引きぐわを使った
- (6) 苗を植えるのに移植ごてを使った
- (7) まきを割るのにナタを使った
- (8) そばを挽く（ひく）のに石臼を使った
- (9) もちをつくのに臼と杵を使った
- (10) 魚をおろすのに出刃包丁を使った
- (11) よもぎやにんじんをするのにすり鉢を使った

質問 D：「労作体験教育（労作実習）」に対する印象と効用に関する意識調査

[1] 以下の質問にお答え下さい。たくさんあって書ききれない、という場合には、特に顕著なものをいくつかお書き下さい。ない場合には「なし」とお書き下さい。

- ① 労作実習の中で、よい意味で強く印象に残っていることがありましたら、以下にお書き下さい。

②労作実習の中で、よくない意味で強く印象に残っていることがありましたら、以下にお書き下さい。

[2] 労作実習での活動で、現在までに役に立ったと思うことがありましたら、以下にお書き下さい。

①生活の上で役立ったと思うこと

②仕事の上で役立ったと思うこと

[3] 労作実習の活動の中で、子どもの教育にとって役だったことがありましたら、職場だけでなく、ご自身のお子さんの場合も含めて以下にお書き下さい。

質問 E:「労作体験教育 (労作実習)」を受けて変わったこと、実感したことに関する意識調査

「労作実習」の授業を受けてものの見方が変わったり、いろいろな事を実感できたりしたことがどの程度ありましたか。以下のそれぞれについて最もよく当てはまる数字に○印をつけてください。(選択肢はいずれの項目も「5. 強くそう思う, 4. そう思う, 3. どちらともいえない, 2. そう思わない, 1. 全くそう思わない」である)

- (1) 自然についての関心が高まった
- (2) 植物は光を必要としていることが実感できた
- (3) 栽培した植物はよく虫に食べられることが実感できた
- (4) 食文化についての関心が高まった
- (5) 自分で栽培した野菜や果物のおいしさが実感できた
- (6) 料理や加工食品を作ることの充実感が実感できた
- (7) 協力の大切さが実感できた
- (8) 苦勞して目標を達成することの大切さが実感できた

質問 F: 調査対象者に関する質問

各質問を男女別や入学年別など様々な点から分析するために、さらにいくつかお聞きします。

F1 性別はどちらですか。

- 1 男性 2 女性

F2 あなたの大学入学年はいつですか。

() 年 4 月 入 学

編入学、転入学の人は何年、何年次に入学したかご記入ください。

() 年 () 年次に編・転入学

F3 あなたの職業はどのような内容ですか。当てはまる数字に○印をつけて下さい。

- 1 教育・福祉職
- 2 専門職・技術職
- 3 事務職・サービス・工場での仕事
- 4 自営業・家族従業
- 5 農林漁業
- 6 専業主婦・主夫
- 7 その他 (学生, 無職など)

F3-2 上記 F3 で、1 にお答えいただいた方にお伺いします。そのお仕事先はつぎのうちどれですか。

- 1 保育園 2 幼稚園 3 小学校 4 中学校 5 塾 6 その他

労作実習では栽培、料理などでいろいろな道具を使用した*。11 の道具使用について、経験の有無、うまく使えたか否かを尋ねるものである。

4. 質問 D (「労作体験教育 (労作実習)」に対する印象と効用に関する意識調査)

労作実習について印象に残っている活動と役に立ったと思う活動を自由に記述するものである。

5. 質問 E (「労作体験教育 (労作実習)」を受けて変わったこと, 実感したことに関する意識調査)

労作実習についてもものの見方が変わったり, いろいろな事を実感したりしたことがどの程度あったかを尋ねるものである。どの項目も「5. 強くそう思う」から「1. 全くそう思わない」までの 5 段階評定である。

6. 質問 F (調査対象者自身についての質問)

調査対象者の性別, 入学年次, 職業について質問する。

結 果

0. 分析対象者

質問紙回収数は 206 部であり, 回収率は 24% であった。そのうち, 選択肢のある質問項目にひとつでも回答しなかった者および入学年度を記載しなかった者, 合計 40 名を除き, 166 名を分析対象者とする。その内訳は表 2 の通り。

1. 「労作体験教育 (労作実習)」に対する興味・難しさ

質問 A は労作実習を受けていたとき, 労作実習についての興味・難しさをどのように感じていたか, また現在はどうかを問うものであった。「5. 強くそう思う」～「1. 全くそう思わない」の 5 つの選択肢ごとの人数を表 3 に示す。また, 肯定反応 (はいと表記) を示す選択肢 (「5. 強くそう思う」, 「4. そう思う」), 中間反応 (どちらともいえないと表記) を示す選択肢 (「3. どちらともいえない」), 否定反応 (いいえと表記) を示す選択肢 (「2. そう思わない」, 「1. 全くそう思わない」) 別に集計した割合 (%) を表 4, 図 1-6 に示す。

[興味深さについて]

労作実習を受けていた当時の興味深さについて肯定的な反応をする割合は, いずれの入学時期においても 70% 程度であった。しかし, 「興味深いものでなかった」という否定的反応は入学時期によって異なり, I 期では 20% 者が否定的な反応を示している。現在の気持ちを問う [2] では, 80% 以上が肯定的な反応を示している。いずれの入学時期でも現在のほうがより興味深いと答えている。

[めんどろさについて]

労作実習を受けていた当時のめんどろさについて, 「めんどろでなかった」と反応する割合は, いずれの入学時期においても 60% 程度にとどまった。「めんどろだった」という反応

表 2 分析対象者の属性別人数

	人数	1. 教育・福祉職	3. 小学校, 4. 中学校
I 期	38 (6)	23	21
II 期	57 (6)	33	24
III 期	71 (10)	39	31

() 内は男性の人数, 3, 4 の人数は 1. 教育・福祉職の中の人

表3 労作実習に対する興味・難しさの反応分布 (人)

		[1] 当時の気持ち			[2] 現在の気持ち		
		(1) 興味深い	(2) めんどくさい	(3) 難しい	(1) 興味深い	(2) めんどくさい	(3) 難しい
I 期	強くそう思う	3	0	0	12	0	0
	そう思う	20	7	3	24	1	5
	どちらともいえない	7	8	7	1	1	2
	そう思わない	8	17	21	1	24	21
	全くそう思わない	0	6	7	0	12	10
II 期	強くそう思う	9	1	0	22	0	1
	そう思う	31	10	3	32	1	3
	どちらともいえない	12	16	7	2	8	3
	そう思わない	3	26	35	1	29	29
	全くそう思わない	2	4	12	0	19	21
III 期	強くそう思う	11	1	0	26	0	1
	そう思う	44	8	5	35	4	6
	どちらともいえない	13	18	11	9	12	8
	そう思わない	3	35	42	1	32	36
	全くそう思わない	0	9	13	0	23	20

表4 労作実習に対する興味・難しさにおける肯定、否定の割合 [() 内は人数]

[1] 当時の気持ち (1) 興味深い

	I 期	II 期	III 期
はい (肯定)	61(23)	70(40)	77(55)
中間	18(7)	21(12)	18(13)
いいえ (否定)	21(8)	9(5)	4(3)

[2] 現在の気持ち (1) 興味深い

	I 期	II 期	III 期
はい (肯定)	95(36)	95(54)	86(61)
中間	3(1)	4(2)	13(9)
いいえ (否定)	3(1)	4(1)	1(1)

[1] 当時の気持ち (2) めんどくさい

	I 期	II 期	III 期
はい (肯定)	18(7)	19(11)	13(9)
中間	21(8)	28(16)	25(18)
いいえ (否定)	61(23)	53(30)	62(44)

[2] 現在の気持ち (2) めんどくさい

	I 期	II 期	III 期
はい (肯定)	3(1)	2(1)	6(4)
中間	3(1)	14(8)	17(12)
いいえ (否定)	95(36)	84(48)	77(55)

[1] 当時の気持ち (3) 難しい

	I 期	II 期	III 期
はい (肯定)	8(3)	5(3)	7(5)
中間	18(7)	12(7)	15(11)
いいえ (否定)	74(28)	82(47)	77(55)

[2] 現在の気持ち (3) 難しい

	I 期	II 期	III 期
はい (肯定)	13(5)	7(4)	10(7)
中間	5(2)	5(3)	11(8)
いいえ (否定)	82(31)	88(50)	79(56)

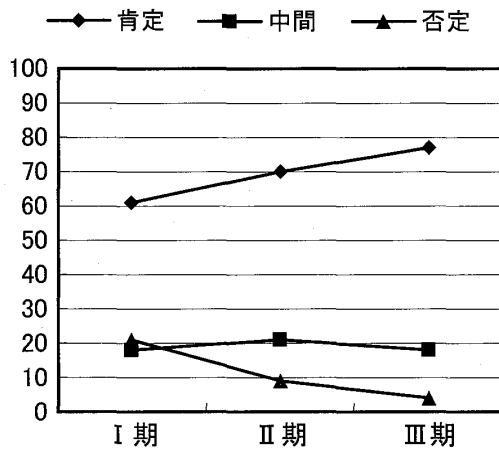


図1 [1] 当時の気持ち (1) 興味深い

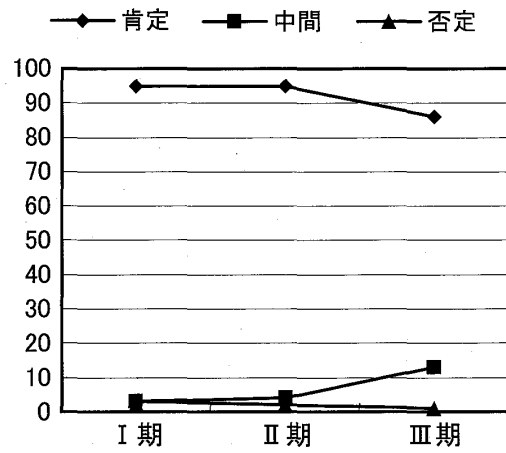


図4 [2] 現在の気持ち (1) 興味深い

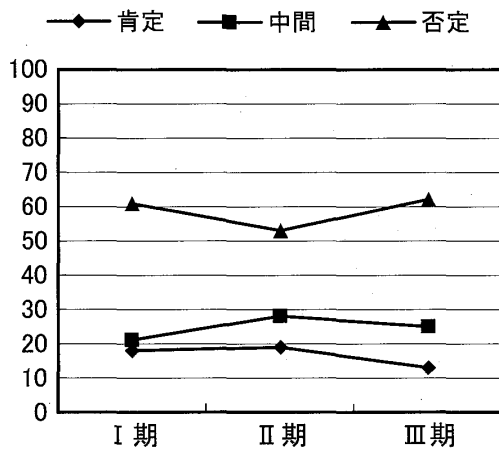


図2 [1] 当時の気持ち (2) めんどくさい

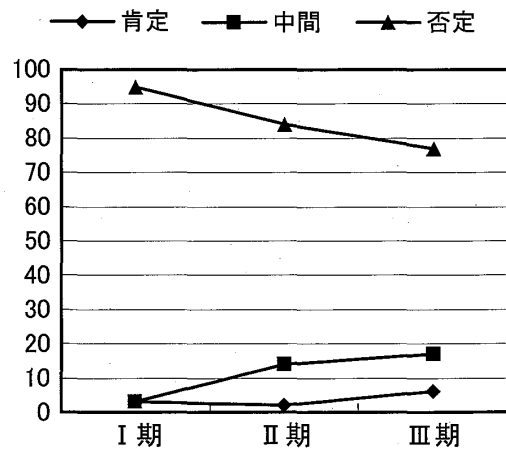


図5 [2] 現在の気持ち (2) めんどくさい

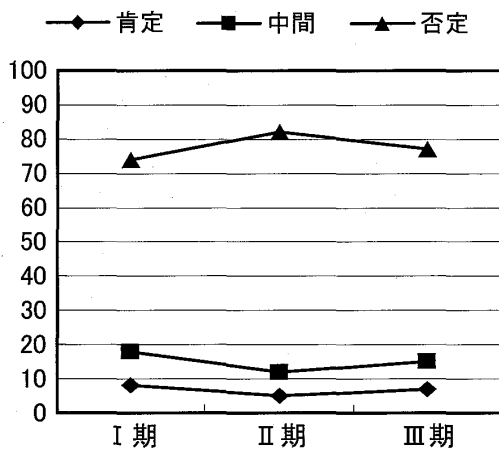


図3 [1] 当時の気持ち (3) 難しい

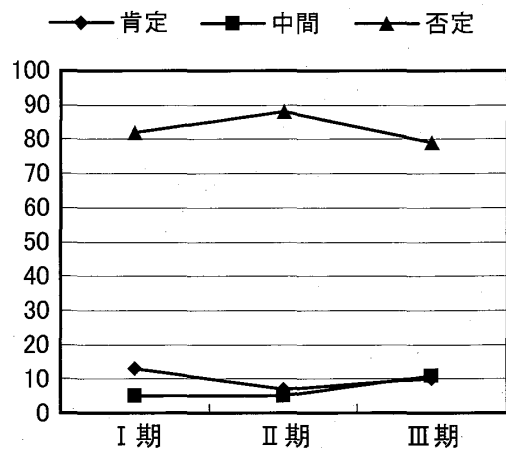


図6 [2] 現在の気持ち (3) 難しい

は20%以下であった。現在の気持ちを問う〔2〕では、いずれの時期でも75%以上が「めんどろでない」と反応している。「めんどろとは思わない」という否定的反応をする割合は、いずれの入学時期でもかなり現在のほうが多い。

〔難しさについて〕

労作実習を受けていた当時の難しさについて「難しくなかった」と反応をする割合は、いずれの入学時期においても80%程度であった。「難しかった」という反応は10%以下であった。現在の気持ちを問う〔2〕では、80%程度の者が「難しいものではない」という反応をしている。「難しいとは思わない」とする割合は、いずれの入学時期でも現在のほうが少ない。

全体としてみると、どの入学時期の回答者でも現在の気持ちとしては、多くの者が興味深く、めんどろではなく、難しくはないと思っていることがわかる。ただし、当時はそのような気持ちではなかったようである。特に、Ⅰ期の入学生では、授業を受けていた当時はあまり興味がなかったと答える学生が少なからずいる。

2. 「労作体験教育（労作実習）」での活動についての記憶

質問Bは22の労作実習の活動について、経験の有無、印象を尋ねるものである。選択肢ごとの人数を入学時期別に表5に、経験した記憶のある活動の割合を表6に示す。また、経験したことの活動でよい印象が残っていると答えた（aを選択した）割合を表7に示す。ただし、経験した活動の割合が活動内容によって大きく違うため、15%以上の者が経験したことの活動についてのみその値を表7に記載することとした。以下、22の労作実習の活動を、(1)～(3)の森林での活動、(4)～(10)の栽培活動、(11)～(18)の調理、食品加工活動、(19)～(22)の手工芸活動に分類し結果をまとめる。

〔森林での活動〕

植林、下草刈りの活動はいずれの時期でも経験したことの活動がある程度いるが、枝打ちについては経験者の割合が少ない。それぞれの活動で、よい印象が残っている割合を見てみると、いずれの時期でも植林については半数以上がよい印象を持っている。下草刈りについては、40%程度の者がよい印象を持っているのがわかる。枝打ちに関しては、よい印象を持っている者の割合が低い。

〔栽培活動〕

草花、野菜、イモ類の栽培はある程度経験した者がいるが、いちご、そば、麦、米については経験者の割合はⅠ期のそば栽培を除き25%以下である。草花の栽培については、Ⅰ期、Ⅱ期、Ⅲ期となるにしたがって経験者の割合は減少している。表7からわかるように、いずれの時期とも花、野菜、イモの栽培などについては、40%～70%がよい印象を持っている。

〔調理、食品加工活動〕

収穫物の調理やそば打ちやうどん作りの経験を持っている者は、どの時期でもある程度いるが、パン、バター、豆腐、ジャム、ソーセージ、よもぎ団子などの食品加工活動の経験者は、Ⅱ期以前にはいない。ただし、Ⅱ期以降でもその割合が必ずしも高くない。活動の印象については、そば・うどん作りについてよい印象が残っている者の割合は、Ⅰ期、Ⅱ期では90%を超えているが、Ⅲ期では70%程度であった。

表5 労作実習での活動についての記憶の反応分布(人)

		(1)植林	(2)下草刈り	(3)枝打ち	(4)草花栽培	(5)野菜栽培	(6)イモ類栽培	(7)いちご栽培	(8)そば栽培
I期	a. よい印象	21	10	2	10	10	15	0	18
	b. よくない印象	2	5	0	1	1	1	1	0
	c. 印象に残っていない	8	7	4	12	6	5	2	8
	d. 経験しない	7	16	32	15	21	17	35	12
II期	a. よい印象	23	16	2	12	34	19	8	7
	b. よくない印象	2	3	2	0	0	0	0	0
	c. 印象に残っていない	20	19	6	15	14	14	4	3
	d. 経験しない	12	19	47	30	9	24	45	47
III期	a. よい印象	25	15	2	11	43	26	8	0
	b. よくない印象	3	1	0	0	1	0	0	0
	c. 印象に残っていない	20	23	10	12	23	20	9	7
	d. 経験しない	23	32	59	48	4	25	54	64
		(9)麦作り	(10)米作り	(11)調理	(12)そば・うどん作り	(13)パン作り	(14)バター作り	(15)豆腐作り	
I期	a. よい印象	0	0	13	11	0	0	0	
	b. よくない印象	0	0	0	0	0	0	0	
	c. 印象に残っていない	1	2	4	0	0	0	0	
	d. 経験しない	37	36	21	27	38	38	38	
II期	a. よい印象	0	3	26	21	6	6	12	
	b. よくない印象	0	0	0	0	0	0	0	
	c. 印象に残っていない	0	2	10	2	0	4	1	
	d. 経験しない	57	52	21	34	51	47	44	
III期	a. よい印象	0	3	32	11	13	29	6	
	b. よくない印象	0	0	0	0	0	0	0	
	c. 印象に残っていない	5	6	14	5	6	3	4	
	d. 経験しない	66	62	25	55	52	39	61	
		(16)ジャム作り	(17)ソーセージ作り	(18)よもぎ団子作り	(19)草木染め	(20)紙すき	(21)織物作り	(22)糸つむぎ	
I期	a. よい印象	0	0	0	2	2	1	1	
	b. よくない印象	0	0	0	0	0	0	0	
	c. 印象に残っていない	0	0	0	0	0	0	0	
	d. 経験しない	38	38	38	36	36	37	37	
II期	a. よい印象	4	2	8	8	8	9	0	
	b. よくない印象	0	0	0	0	0	0	0	
	c. 印象に残っていない	0	3	1	6	5	2	2	
	d. 経験しない	53	52	48	43	44	46	55	
III期	a. よい印象	9	10	8	18	24	0	2	
	b. よくない印象	0	1	1	1	1	1	0	
	c. 印象に残っていない	4	2	3	8	3	4	5	
	d. 経験しない	58	58	59	44	43	66	64	

表6 経験した記憶のある活動の割合()内人数

	(1)植林	(2)下草刈り	(3)枝打ち	(4)草花栽培	(5)野菜栽培	(6)イモ類栽培	(7)いちご栽培	(8)そば栽培
I期	82 (31)	58 (22)	16 (6)	61 (23)	45 (17)	55 (21)	8 (3)	68 (26)
II期	79 (45)	67 (38)	18 (10)	47 (27)	84 (48)	58 (33)	21 (12)	18 (10)
III期	68 (48)	55 (39)	17 (12)	32 (23)	94 (67)	65 (46)	24 (17)	10 (7)
	(9)麦作り	(9)米作り	(11)調理	(12)そば・うどん作り	(13)パン作り	(14)バター作り	(15)豆腐作り	(16)ジャム作り
I期	3 (1)	5 (2)	45 (17)	29 (11)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)
II期	0 (0)	9 (5)	63 (36)	40 (23)	11 (6)	18 (10)	23 (13)	7 (4)
III期	7 (5)	13 (9)	65 (46)	23 (16)	27 (19)	45 (32)	14 (10)	18 (13)
	(17)ソーセージ作り	(18)よもぎ団子作り	(19)草木染め	(20)紙すき	(21)織物作り	(22)糸つむぎ		
I期	0 (0)	0 (0)	5 (2)	5 (2)	3 (1)	3 (1)		
II期	9 (5)	16 (9)	25 (14)	23 (13)	19 (11)	4 (2)		
III期	18 (13)	17 (12)	38 (27)	39 (28)	7 (5)	10 (7)		

表7 経験した活動の中でよい印象が残っている割合

	(1)植林	(2)下草刈り	(3)枝打ち	(4)草花栽培	(5)野菜栽培	(6)イモ類栽培	(7)いちご栽培	(8)そば栽培
I期	68	45	33	43	59	71	—	69
II期	51	42	20	44	71	58	67	70
III期	52	38	17	48	64	57	47	—
	(9)麦作り	(9)米作り	(11)調理	(12)そば・うどん作り	(13)パン作り	(14)バター作り	(15)豆腐作り	(16)ジャム作り
I期	—	—	76	100	—	—	—	—
II期	—	—	72	91	—	60	92	—
III期	—	—	70	69	68	91	60	69
	(17)ソーセージ作り	(18)よもぎ団子作り	(19)草木染め	(20)紙すき	(21)織物作り	(22)糸つむぎ		
I期	—	—	—	—	—	—		
II期	—	89	57	62	82	—		
III期	77	67	67	86	—	—		

註：「—」は経験した記憶のある活動のうち割合が15%を超えない箇所

[手工芸活動]

手工芸活動の経験者はI期ではほとんどなく、草木染め、紙すきについてはII期、III期となるにしたがって経験者が増えてくる。II期、III期の草木染め、紙すきについて、よい印象が残っている者の割合は高い。

森林での活動から手工芸活動までの活動について全体的傾向を検討する。I期では、植

林や下草刈りなどの森林活動、草花、野菜、イモ類、ソバ栽培が多い。Ⅱ期では、調理、そば・うどん作り、豆腐作りが増えてくる。Ⅲ期ではバター作り、草木染め、紙すきの割合が多くなる。目的の項でも述べたように、時期による労作活動の違いのあることを示している。経験した活動の中でよい印象が残っている割合については、時期によって値が大きく違っている活動にそば・うどん作りがある。

3. 「労作体験教育（労作実習）」での道具使用についての記憶

質問Cは栽培、料理などの活動で使用した11の道具使用について、その経験の有無、それぞれの道具をうまく使えたか否かを尋ねるものであった。選択肢ごとの人数を入学時期別に表8に示す。また、使用したことのある道具で割合うまく使えたと思うと答えた(aを選択した)割合を表9に示す。ただし、道具によって使用した経験のある割合が大きく違うため、15%以上の者が使用したことのある道具のみ値を記載することとした。

表8 労作実習での道具使用についての記憶の反応分布（人）

		(1)唐ぐわ	(2)大ガマ	(3)ノコギリ	(4)万能ぐわ	(5)引きぐわ	(6)移植ごて
Ⅰ期	a. 割合うまく使えた	10	4	2	14	11	12
	b. あまりうまく使えなかった	7	6	1	12	12	2
	c. 使った記憶だけがある	5	9	5	5	5	9
	d. 使用していない	16	19	30	7	10	15
Ⅱ期	a. 割合うまく使えた	10	16	2	22	16	17
	b. あまりうまく使えなかった	11	12	4	19	16	2
	c. 使った記憶だけがある	18	6	4	13	12	12
	d. 使用していない	18	23	47	3	13	26
Ⅲ期	a. 割合うまく使えた	8	19	3	22	13	9
	b. あまりうまく使えなかった	11	13	3	12	18	5
	c. 使った記憶だけがある	18	10	9	18	12	8
	d. 使用していない	34	29	56	19	28	49
		(7)ナタ	(8)石臼	(9)臼と杵	(10)出刃包丁	(11)すり鉢	
Ⅰ期	a. 割合うまく使えた	3	4	0	0	0	
	b. あまりうまく使えなかった	1	2	0	0	0	
	c. 使った記憶だけがある	6	4	1	0	0	
	d. 使用していない	28	28	37	38	38	
Ⅱ期	a. 割合うまく使えた	6	14	10	2	6	
	b. あまりうまく使えなかった	6	0	6	3	1	
	c. 使った記憶だけがある	3	2	5	1	4	
	d. 使用していない	42	41	36	51	46	
Ⅲ期	a. 割合うまく使えた	1	3	2	1	11	
	b. あまりうまく使えなかった	3	1	3	2	1	
	c. 使った記憶だけがある	9	3	5	4	6	
	d. 使用していない	58	64	61	64	53	

表9 道具を使用した経験がある場合に“割合うまく使えた”割合

	(1)唐ぐわ	(2)大ガマ	(3)ノコギリ	(4)万能 ぐわ	(5)引き ぐわ	(6)移植 ごて	(7)ナタ	(8)石臼	(9)臼と杵	(10)出刃 包丁	(11)すり 鉢
I 期	45	21	25	45	39	52	30	40	—	—	—
II 期	26	47	20	41	36	55	40	88	48	—	55
III 期	22	45	20	42	30	41	8	—	—	—	61

注：「—」は道具の使用経験が15%を超えない箇所

以下、11の道具使用を、(1)～(3)の森林での活動、(4)～(6)の栽培活動、(7)～(11)の調理、食品加工活動に分類し、結果をまとめる。

〔森林での活動〕

唐ぐわ、大ガマはある程度使用した経験を持っているが、枝打ちするのにノコギリを使用した経験を持つ者は少ない。唐ぐわ、大ガマをうまく使えたかどうかに関しては、うまく使えたと答える者はいずれの時期でも半数に満たない。

〔栽培活動〕

畑での栽培活動における万能ぐわ、引きぐわ、移植ごての使用については、他の道具に比べ使用した経験のある者が多くいる。それぞれの道具がうまく使えたかどうかについては、多くても半数が割合うまく使えたと答えている。

〔調理、食品加工活動〕

ナタ、石臼、出刃包丁などの道具の使用については、全体的に使用した経験のある者が少ない。ただ、II期においてそばを挽くのに石臼を使用したり、もちをつくのに臼や杵を使ったりしたことがある者、III期ではすり鉢を使用したもののある者が少なからずいる。そばを挽くときに石臼が割合うまく使えたとする反応は予想以上に多い。それに対し、もちをつくときの臼や杵はうまく使えたという反応は多くはない。

道具全体の使用についてみると、植林や栽培で使用する道具についてはある程度使えていることがわかる。

4. 「労作体験教育（労作実習）」に対する印象と効用

質問Dは労作実習について印象に残っている活動と役に立ったと思う活動を自由に記述させるものであった。代表的なものを質問ごとに資料1に示す。

よかった印象、生活や仕事の上で役に立ったこと、子どもの教育にとって役立ったことが多く記載されている。

5. 「労作体験教育（労作実習）」を受けて変わったこと、実感したこと

質問Eは労作実習についてものの見方が変わったり、いろいろな事を実感したりしたことがどの程度あったかを尋ねるものであった。「5. 強くそう思う」～「1. 全くそう思わない」の5つの選択肢ごとの人数を表10に示す。また、肯定反応を示す選択肢（「5. 強くそう思う」、「4. そう思う」）、中間反応を示す選択肢（「3. どちらともいえない」）、否定反応を示す選択肢（「2. そう思わない」、「1. 全くそう思わない」）別に集計した割合（%）を表11、図7～14に示す。

表 10 労作実習を受けて変わったこと、実感したことの反応分布 (人)

	(1)自然 への関心	(2)光の 必要性	(3)植物 と虫	(4)食文化	(5)おいし さの実感	(6)作るこ との充実感	(7)協力	(8)目標 の達成	
Ⅰ期	強くそう思う	4	4	4	3	10	2	11	8
	そう思う	23	12	11	10	11	11	19	21
	どちらともいえない	10	19	19	23	14	21	7	9
	そう思わない	1	1	2	1	2	2	1	0
	全くそう思わない	0	2	2	1	1	2	0	0
Ⅱ期	強くそう思う	16	5	9	12	20	16	26	20
	そう思う	27	27	28	22	17	16	20	21
	どちらともいえない	11	18	15	19	17	20	8	11
	そう思わない	2	6	3	3	2	2	1	3
	全くそう思わない	1	1	2	1	1	3	2	2
Ⅲ期	強くそう思う	14	8	12	13	20	16	25	22
	そう思う	35	18	26	26	23	21	31	22
	どちらともいえない	18	35	21	25	22	24	8	19
	そう思わない	3	5	10	2	3	7	5	3
	全くそう思わない	1	5	2	5	3	3	2	5

表 11 労作実習を受けて変わったこと、実感したことにおける肯定、否定の割合 [() 内は人数]

(1) 自然への関心			(2) 光の必要性			(3) 植物と虫		
Ⅰ期	Ⅱ期	Ⅲ期	Ⅰ期	Ⅱ期	Ⅲ期	Ⅰ期	Ⅱ期	Ⅲ期
肯定 71(27)	75(43)	69(49)	肯定 42(16)	56(32)	37(26)	肯定 39(15)	65(37)	54(38)
中間 26(10)	19(11)	25(18)	中間 50(19)	32(18)	49(35)	中間 50(19)	26(15)	30(21)
否定 3(1)	5(3)	6(4)	否定 8(3)	12(7)	14(10)	否定 11(4)	9(5)	17(12)
(4) 食文化			(5) おいしさの実感			(6) 作ることの充実感		
Ⅰ期	Ⅱ期	Ⅲ期	Ⅰ期	Ⅱ期	Ⅲ期	Ⅰ期	Ⅱ期	Ⅲ期
肯定 34(13)	60(34)	55(39)	肯定 55(21)	65(37)	61(43)	肯定 34(13)	56(32)	52(37)
中間 61(23)	33(19)	35(25)	中間 37(14)	30(17)	31(22)	中間 55(21)	35(20)	34(24)
否定 5(2)	7(4)	10(7)	否定 8(3)	5(3)	8(6)	否定 11(4)	9(5)	14(10)
(7) 協力			(8) 目標の達成					
Ⅰ期	Ⅱ期	Ⅲ期	Ⅰ期	Ⅱ期	Ⅲ期			
肯定 79(30)	81(46)	79(56)	肯定 76(29)	72(41)	62(44)			
中間 18(7)	14(8)	11(8)	中間 24(9)	19(11)	27(19)			
否定 3(1)	5(3)	10(7)	否定 0(0)	9(5)	11(8)			

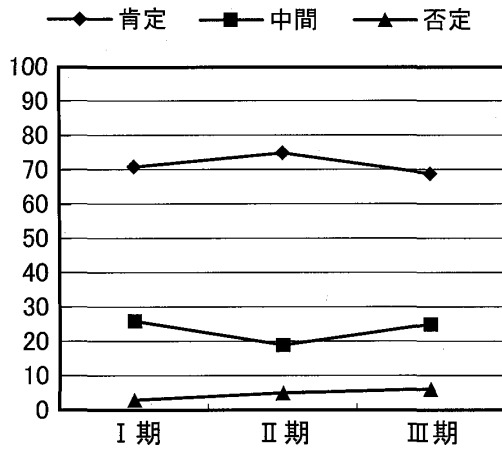


図 7 (1) 自然への関心

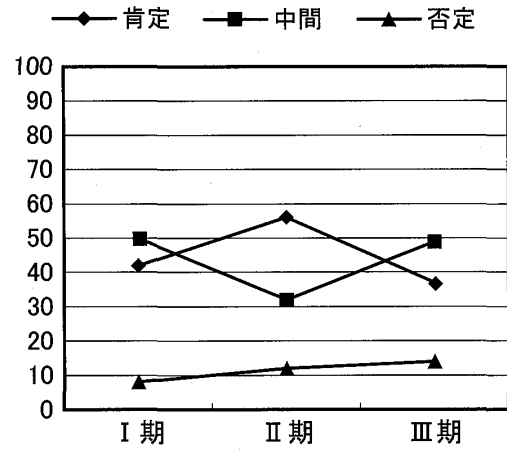


図 8 (2) 光の必要性

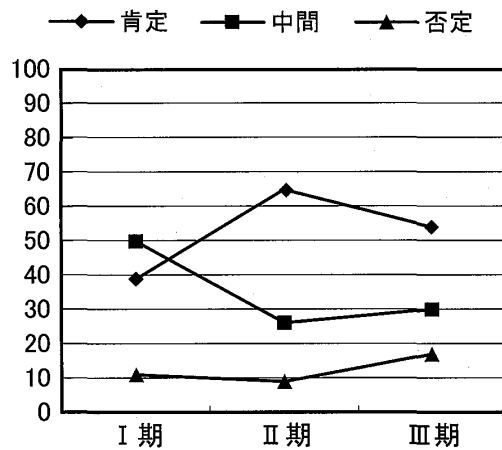


図 9 (3) 植物と虫

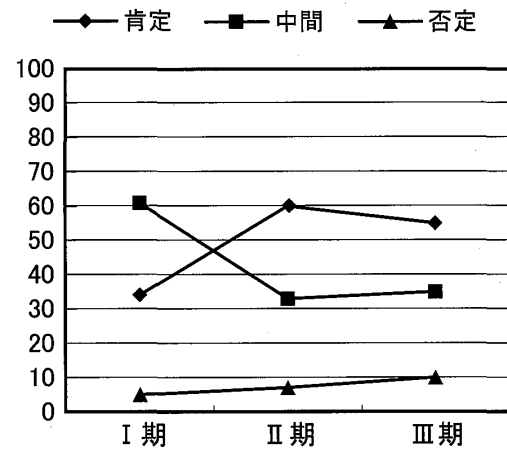


図 10 (4) 食文化

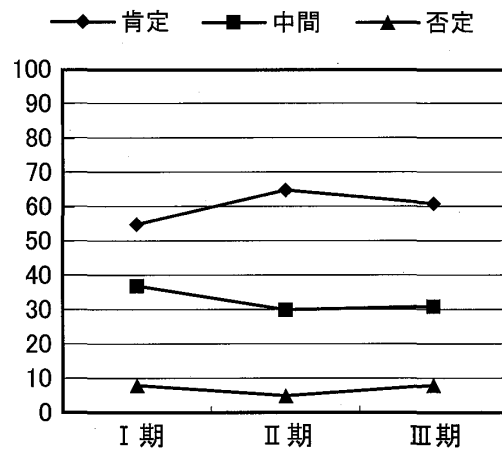


図 11 (5) おいしさの実感

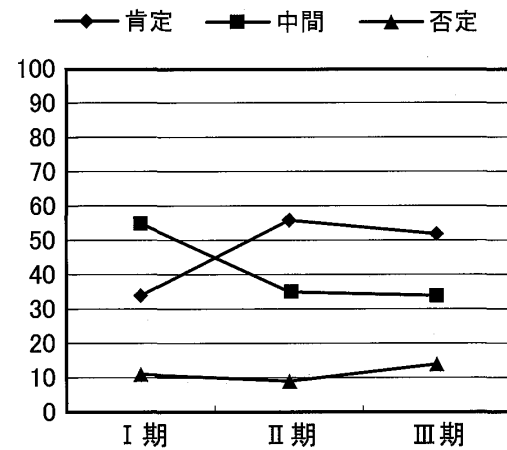


図 12 (6) 作ることの充実感

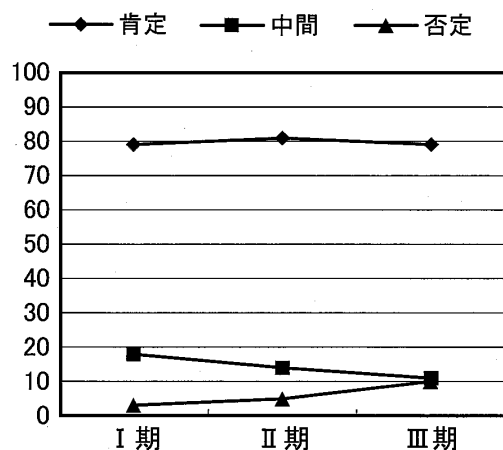


図13 (7) 協力

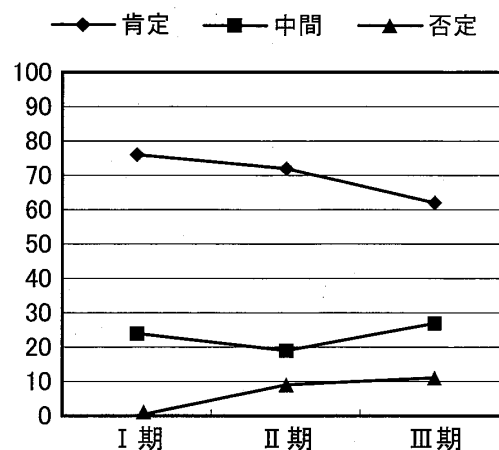


図14 (8) 目標の達成

[自然認識]

(1)～(3)については、自然認識の変化を問う質問である。自然についての関心が高まったかどうかについて、肯定的な反応をする者は70%程度いる。それに対し、植物が光を必要としていることや栽培した植物がよく虫に食べられることの実感については、肯定的反応は40%～60%程度である。入学時期による反応の違いについて言えば、(2)と(3)についてII期の値が高い。

[食文化への関心]

(4)は食文化への関心を問う質問である。肯定的反応はI期では34%であったが、II期、III期では50%を超えている。入学時期による反応の違いについて言えば、I期の値が他の時期より20%程度低い。

[おいしさの実感、調理の充実感]

(5)～(6)は栽培した野菜や果物のおいしさや、料理や加工食品を作ることの充実感が実感できたかを問う質問である。おいしさの実感についての肯定的反応はいずれの時期でも50%を超えているが、料理などを作ることの充実感についての肯定的反応はI期では34%と低い、II期、III期では50%を超えている。

[協力や目標達成の実感について]

(7)～(8)は協力の大切さや苦勞して目標を達成することの大切さが実感できたかどうかを問う質問である。協力の大切さを実感したかどうかについての肯定的反応は、いずれの時期でも80%程度と非常に高い。また、苦勞して目標を達成することの大切さを実感したかどうかについての肯定的反応も、60%を超えており高いことがわかる。入学時期による違いは特に見られない。

全体として、自然認識についてはII期が高い値を示し、食文化や調理などの充実感についてはI期の値が低かった。協力や目標達成の実感については入学時期による違いは見られなかった。

考 察

結果の概要まとめ、解釈可能な項目について考察を行う。

(1) 結果1でも述べたように、労作実習についての興味は高く、それほど難しいものでもめんどうでもないと考えている。労作実習についてのよい印象記述の結果を見ても、そばの実を収穫して粉にして好きなものを作ったとか、とうふ作りを通して、素材からの工程を体験できたことなどさまざまな活動に興味を抱いたことがわかる。全体として、労作実習について興味を持っていること、難しくめんどうでもないと考えていることが明らかになった。

(2) 結果1でも述べたように、Ⅰ期の卒業生は授業を受けていた当時、労作実習について興味を持てなかったと回答する者がややいるが、これは森林での活動や園芸などが多かったためかもしれない。また、単純な労働作業が多く、収穫したものを調理するというのもしていなかったことにもよるのであろう。労作実習についての印象記述の結果を見ても、「よごれるのがいやだった気持ちがありました」というような回答があることとも一致している。

(3) 結果2の〔調理、食品加工活動〕でも述べたように、そば・うどん作りの印象がⅢ期で低い。Ⅲ期での印象がⅠ期、Ⅱ期に比べ低かったのは、種を植えて収穫し、ソバ打ちをするという一連の活動を行わなかったためと考える。

(4) 結果5の〔自然認識について〕でも述べたように、労作実習を受けて変わったこと、実感したことについていえば、自然認識が深まったという反応はⅡ期に多かった。これは、光合成の仕組みなどについての講義を行ったことと関連していることが考えられる。

(5) 結果5の〔食文化への関心〕、〔おいしさの実感、調理の充実感〕で述べたように食文化の関心が高まった、料理や加工食品を作ることの充実感が実感できたという反応は、そのような活動が多くなされたⅡ期、Ⅲ期に多い。これはⅠ期で調理などの活動が少なかったためであると考ええる。

(6) 結果5の〔協力や目標達成の実感〕で述べたように、協力や苦勞して目標を達成すること大切さが実感できたという反応は、いずれの時期でも多かった。労作教育で従来その重要性がいわれてきた協力や苦勞して目標を達成することの大切さが実感できていることがわかる。

このような結果から、労作実習の教育効果は高いものであったといえる。以上のような結果は、今後の授業改善にどのような示唆を与えるのだろうか。経験した活動でよい印象を持ったかどうか、どのようなことを実感したかなどについては、労作実習の内容の影響を受けていると考えられる。特にⅡ期では、種まきから、栽培、収穫、料理という一連の活動がなされ、また料理や加工食品をいろいろ作っている機会があったことから、そば・うどん作りについてよい印象を持ち、自然認識が深まり、料理が加工食品を作ることの充実感が実感できたという結果につながったのだろう。この点を考えると、種まきから栽培、収穫、料理という一連の活動を充実させることが今後の授業改善にとって重要であるといえるだろう。何か、代表的な作物を決めて、全員がそれにかかわることができるような教育環境を充実させることが必要であると考ええる。

しかし、今回の調査結果にはいくつかの問題が残されている。まず、回収率が24%と低かった点である。このことから、回答者は労作教育についてある程度興味、関心があった卒業生であるという点を否定できない。分析に当たってはこの点を考慮に入れる必要があるといえるが、入学時期の違いによる教育効果の影響についての分析に関しては、その影響は少ないと想定できる。次に、回答者の記憶の問題である。Ⅰ期とⅢ期の回答者では卒業後の年数が異なるため記憶が異なる可能性が高い。したがって、入学時期の違いが教育効果に及ぼす影響が、労作実習内容の違いによるのか、回答者の記憶の違いによるのか区別することが難しい。この点を考慮に入れて考察をする必要性はあるだろう。

今後、以上のような問題点のあることを考慮に入れて、新たな実践を行いその効果を検証することが重要な課題となろう。

註

*主な道具についてどのように使用したのかを示す。

唐ぐわ：山の斜面にバケツ大の穴を掘り、ヒノキの苗木を植林する。

大ガマ：植林後、5～6年目までの間、苗木の周りの下草を刈り払う。

ノコギリ：植林後、十数年目から下の枝を順次切り落としていく。

万能グワ：畑の土を起こし、土を細かく砕く。

引きグワ：畑の土を引き寄せ、うねたてをしたり整地をしたりする。

ナタ：間伐材を乾燥し、割って薪を作り燃料にする。

引用文献

- 伊藤秀子・大塚雄作編 1999 ガイドブック大学授業の改善 有斐閣
岩崎哲郎・伏見陽児 2003 大学における授業の改善をめざして一教職科目「生活科教材研究」の実践 東北大学出版会
Kerschesteiner, G. 1955 Begriff der Arbeitsschule. 11. Aufl. (東岸克好・米山弘訳 1983 アルバイツシューレ 玉川大学出版部)
小原國芳 1931 日本の労作学校1 玉川学園出版部
小原國芳 1933 日本の労作学校2 玉川学園出版部
小原國芳 1976 玉川塾の教育 玉川大学出版部
大桃伸一 1980 G.ケルシェンシュタイナーの労作教育思想(その1) 東北大学教育学部研究年報, 28, 129-147.
大谷時中 1982 労作体験と全体観の教育 茨城キリスト教大学研究紀要, 16, 1-19.
立木徹 1996 環境教育の心理学 川島書店
梅根悟 1977 梅根悟教育著作選集1 明治図書 11-129.
渡辺光公 1981 ケルシェンシュタイナーにおける性格形成と労作について 香川大学教育学部研究報告第1部, 51, 43-73.
山崎高哉 1993 ケルシェンシュタイナー教育学の特質と意義 玉川大学出版部

〔付記〕

本研究は茨城キリスト教大学研究助成(2005年度)を受けて行われたものである。
関係の方々に深く感謝する次第である。

資料1 労作実習に対する印象と効用（自由記述結果の抜粋）

[質問 D (1) ①] よい意味で強く印象に残っていること

[Ⅰ期]

- ・労作実習というと十王の山林で夏の暑い時期に下草刈りに汗したことくらいしか、印象がありませんが、林を育てるには「こうした手間と苦労がされているんだ」ということが実感できた。(1984)
- ・山方町の友人宅にお世話になりそばの実を石うすでひいて、めん作りをして食べたこと。(1985)

[Ⅱ期]

- ・そばの実を収穫して石うすでひいて粉にし、だんごなど好きなものを作って食べた。(1987)
- ・山を開墾して、畑にすることの大変さを身を持って体験できた。(1988)
- ・学生みんなで高萩の山で植林をしたり、下草を刈るのにはじめて大ガマを使ったこと。(1988)
- ・干し芋農家に干し芋作りのお手伝いに行った時、茨城名産の干し芋を作る過程が見られて勉強になり、また農家の方に自家製の漬物や野菜を頂くなど、普段できない交流があってよかった。(1990)
- ・バター作り、カッテージチーズ作り、麴作りの体験は「こんなものからこんな風にできるんだ〜!」「手作りのできるんだ〜!」と素直に感動しました。(1992)
- ・バター作りがとても印象に残っています。液体がいつの間にか固体のバターに変身しているのがおもしろかった。(1992)

[Ⅲ期]

- ・豆腐づくりやうどんづくりを通して、素材からの行程を体験できたこと。特に、にがりを入れてからかたまっていく変化。(1995)
- ・バターを作った時 グループの人たちと協力しながらピンをふり、楽しかったことを覚えている。(1996)
- ・そばの栽培など栽培したことのないものを栽培して、栽培する大変さや苦労を実感することができた。(1996)
- ・野菜を育てるのに、肥料などを皆で運んだこと。皆でがんばった!! という印象が残っている。(1996)
- ・こんにゃく作りやソーセージ作りなどの体験。(1997)
- ・木の枝や花、葉を使用してのしぼり染めの染色。(1998)
- ・グループで協力して作り、チームワークも強くなり、更に、同じものを作り、食べるので絆が深まる。(1999)

[質問 D (1) ②] よくない意味で強く印象に残っていること

[Ⅰ期]

- ・たぶん話をよく聞いていなかったんだと思うのですが、なぜ遠くまで来て山に道を作るのかと思っていました。労作実習が始まって何年か(2年目?)だった為 準備段階だったんでしょうが... (1984)
- ・当時は若かったせいもあってか、よごれるのがイヤだった気持ちがありました。(1984)

[Ⅱ期]

- ・暑い中での除草作業 (1988)
- ・十王のほうにいき、グループごとに地図を見て、いろいろ歩きまわったおぼえがあるが、いやだった。今思えば、何の学習なのか、どういったものなのかわからないし、忘れてしまった。(1991)
- ・先生が世話をして下さったので他人事のような印象がありました。グループとか個人にすべて責任を持たせて(たとえかれてしまっても、万一失敗してしまっても) いただけたら真剣になり、もっとよりよい学習になったのかと思います。(1992)
- ・虫が苦手なのはよくないと思いつつもやはり苦手なので野菜作りのとき大変でした。(1993),

[Ⅲ期]

- ・教室の中でのプリントとかの授業全般は、屋外での授業や、物をつくったりするのに比べて、面白みが少なかったように思う。(1996)
- ・前期に作ったものが、夏休み中に収穫時を迎え一部の人しか収穫できなかったこと。(1998)
- ・ドイツのソーセージ作りか何かのビデオで、豚のと殺を見たこと。興味深くはあるが、昼食前だし気持ち悪かった。(1998)
- ・いまいち何のためにやっているのか、どうすることが望まれているのかが分からなかったため、てきとうにやりすぎた。(1999)
- ・大ガマを持って10分位歩いて付いた場所は、只の草むしり程度の所で拍子抜けした記憶がある。もう少し効率良い計画が必要かと思われた。(1999)

[質問 D (2) ①] 生活の上で役立ったこと

[Ⅰ期]

- ・仲間と共に汗水流して労働した体験で協調性が養われたこと。(1985)
- ・栽培すること。自然に関心を持ち、それに常に触れて生活することが好きになれたこと。(1986)

[Ⅱ期]

- ・植林、下草刈り等、木を一本そだてることの大変さ、手間を体験できた。輸入材が多いことに関心が向いた。(1987)
- ・食べるものを自分たちで作る喜びを味わいました。(1988)
- ・家には畑もあるが、土にさわることはほとんどなかった。口にする食物をつくることの大切さがわかってものを大切にするようになった。(1988)
- ・いろいろな道具（カマやくわ）を進んで使うようになった。(1988)
- ・とうふやバター等、たべものの作り方や材料に一段と興味をもつようになったこと。(1992)
- ・天然の“旬”や「何から出来ている」ということに対する意識が高まりました。(1992)
- ・パンやうどんを子供と手作りするようになった。野菜や植物を育てることにより、食事についても考えるようになった。(1993)

[Ⅲ期]

- ・自分一人ではできないことでもみんなで協力すれば達成することができる、ということ。(1995)
- ・食べ物を大切にしようとする気持ちになったこと。食べ物への感謝と知識。(1996)
- ・ベーグル作り、ジャム作りは、今でも好きです。(1997)
- ・こんなにゃくはいもからできていたということを知らなかったのも、実際作ってみて知識だけではなく体験を通して学べたこと。(1997)
- ・無農薬、有機栽培の野菜など、また、それらを使った、食品などを選ぶよう以前よりさらに気をつけるようになった。(1999)

[質問 D (2) ②] 仕事の上で役立ったこと

[Ⅰ期]

- ・土いじり（花壇も含む）に抵抗がなかった。(1983)
- ・小学校(卒業してすぐ採用され14年間勤務)では花壇作業や野菜の栽培をすることが当然あり、道具の使い方など児童に教える立場となり、かなり役に立ちました。(1983)
- ・野菜の栽培、食育、生活作業等、協力する大切さ、自分で栽培した野菜のおいしさ、料理をする楽しさ、自然への関心、共に働く喜び。(1984)
- ・農作業用具を使用した経験(学校での園芸活動において)。(1985)
- ・小学校の教員なので、生活科で畑を耕したり、土作りをしたりするときに、道具の使い方がわかり役立った。(1986)

[Ⅱ期]

- ・野菜や花の栽培で道具の使い方など多少役立っている。(1987)

- ・今は退職してしまいましたが、教員をしていた頃は、畑のうね作りや焼き芋大会等で大学で学んだことが役立ちました。しかしながら、小学校の畑は、学校によっては農家の方がトラクターを入れて耕してくれますが、そうでない学校は担任が自力で耕さなければならないので、土作りの方法や、生活科ではミニトマト、なす、ピーマン、かぼちゃ、枝豆など、様々な野菜を育てるので、教員を目指す学生には即戦力となるよう、野菜作りの方法（育て方）などを教えていただけると、かなり助かるように思います。（1989）

〔Ⅲ期〕

- ・体験活動を重視する上で、これらの自分の体験や経験が、子どもたちの学習活動のヒントになっている。（1995）
- ・小学校で講師をしていた時に、一緒に活動してあげられた。土や虫にさわることに抵抗はなかった。（1995）
- ・5年生の総合で、紙すきを行った。（1997）
- ・道具の使い方を教える時、自信を持って教えられた。（1997）
- ・オーストラリアのあるファームで労働体験したときにまさしく労作実習の栽培、料理が役に立った。（1999）

〔質問 D (3)〕 子どもの教育に役立ったこと

〔Ⅰ期〕

- ・児童、自分の子どもとの栽培の喜びを味わうことができている（草花・イモ類・ゴーヤなど）。（1982）
- ・みみずや昆虫が土から出てきても、恐がらない母になれば、子どもに自然を伝えるのが“自然”にできた。（1983）
- ・子供をもって知ったことですが、作物を育てることは、子供にとって、いろいろな事を学べるものだと思います。今年は5～6月、気温が低く、きゅうりの苗が枯れてしまい、作物が育つには適した気温があることが分かったようです。雨も作物には必要なものであることもわかっているようです。それに、作物（植物も）が育っていく様子や、収穫の時期の観察も、真剣です。子供に収穫を任せた時など、姉弟でよく見て、相談して、食べごろの物をとってきてくれます。そんな姿を見るのはとてもうれしいです。（1984）
- ・現在、食育についての重要性がみなおされている。健康面だけでなく、共に作業する中での成就感コミュニケーション等心の教育にも役立っているのではないか。自然に対する興味、関心をたかめることもできる。環境問題についての意識もめばえさせることができると思う。働く意識なども育てることができるではないか。（1984）
- ・土を耕してよい土を作ることが 植物をつくる・育てるために大切だということや、植物が成長する力強さなどを話しながら作業しています。（1986）

〔Ⅱ期〕

- ・庭でいちごやミニトマトを栽培していて、なると食べています。お店で買う味とは違いますが、自分たちで育てた？家で育ったものを食べる体験は季節感も育つような気がします。土いじり（草取りや種まき、球根植えなど）をするのに比較的、抵抗感なくすることができるように思います。子供も子供会の草取りなどががんばってやってくれます。もっと、子供と共に労作でやったことを思いだし、面倒臭がらず、（料理、パン作りとか）一緒にやっていきたいと思いました。（1987）
- ・刃物を使う時の注意は経験したことが役立ち、けががほとんどなかった。（1987）
- ・農作業について、たとえば「これは、サツマイモのはっぱだよ」など、近所でみかけるもので教えることができたこと。（1988）
- ・農薬を使わなくても、以外と簡単に育てられる野菜があること、豆腐やチーズも家庭で手作りできることを子どもにも教えることができ、実際に家庭農園で作ったりして楽しんでいます。（1989）
- ・労作に限らず、卒業生で教員をしている方に来ていただいて、どういう点を苦労しているか、大学で学んだことが、どのように役立っているか、など話を聞く機会があるといいですね。他の大学を出た先生方は、このような実践的授業は受けていないようなので、誇れる授業だと思います。（1989）

- ・ 道具の使い方など、安全に使えるように指導できました。又、自分の経験話をして、子供達が興味を持ってくれたと思います。(1991)
- ・ 委員会活動(小学校)で、くわの使い方を示したり、クラブや総合、家庭科などで、豆腐やそばetc. どのようにしてできるのかということを、子どもが知りたい時に、知識として残っていたので、伝えることができた。(1993)

[Ⅲ期]

- ・ 食事介護中、食べ残したりしている子どもに対して、例えば米作りがどれほどの手間や期間を経て収穫され、米として流通して食卓へ登るかや、食材の生産地を始め、名称などの質問などを時々話題にしながら食べている。(1995)
- ・ 総合的な学習の時間や生活科等へのヒントになっている。体験や経験の重要性を子どもたちとの生活から特に実感している。教育の場は、このような機会やきっかけを子どもたちに与えることも大切であり、それらを通して子どもたちが子どもたちなりに学んだり体得したりしていると思う。(1995)
- ・ 物をつくる喜び、育てる喜びは、思い出に残るもので、心を育てるものでもある。やっとできたピーマンを、家で焼きそばに入れてもらい「初めて食べられた」と日記にうれしそうに書き残す児童がいた。(1997)
- ・ 自然の中で野菜を育てる時、失敗することもあります、難しさも学びの一つだということを、労作から学びました。(1997)
- ・ 普段なにげなく食べている野菜などでも手間をかけて作られていることを話し、食べ物を大切にしよう話をすることができた。(1998)
- ・ 自然を見る目、自然を愛する心を、素直に、子どもと一緒に感じられる。(1998)
- ・ 日本語教師アシスタントとして約一年間子供と接したとき、日本の食べ物としておにぎりの作り方を体験させたことがあった。その時に、「お米のできるまで」を教え、働くことの大変さ、しかし物の出来上がった時の喜びを伝えた。(1999)

An Attitude Survey of Graduates of Department of Elementary Education with Regard to "Work Education"

Toru Tasuki, Tetsuo Iwasaki, Yohji Fushimi

An attitude survey of graduates of department of elementary education was conducted.

Questions included ; (1)interest and difficulty in "work education", (2)experience and impression of each activity ,(3)use of tools in each activity, (4)description about impression and usefulness,(5)change of cognition of nature, interest of food, cooperation and importance of accomplishment of goal. We interpret the results in relation with activities in "work education".

Key Words: work education, attitude survey, graduates of university